

第4回 タカの渡り全国集会 in 鳴門 2003・・・ノスリの謎を追って・・・

1. 日時 2003年 11月8日 13:30 ～ 9日 11:30
2. 会場 徳島県鳴門市瀬戸町島田島 鳴門ハイツ
3. 主催 日本野鳥の会徳島県支部

テーマ 1 ノスリの渡り

4. 基調講演 ノスリの生態と形態 山形 則男

<ノスリの渡りについて>

伊良湖岬での過去からのデータを見ると、ノスリは非常な勢いで増えている。どうして増えているのかは、わからない。かつては300羽くらい、それが最近では4ケタがカウントされることが多くなった。多くのタカや小鳥が減っている中で、ツミとノスリが増えている。原因については、北の越冬地が減って南下する個体が多くなったのか、それとも他に原因があるのか、よくわからない。日本での繁殖が増えているようにも思えない。



渥美半島での冬期の観察では、10年くらい前まではチュウヒ、オオタカはよく見られ、ノスリは出会える機会は少なかった。それが、ここ4、5年は安定して普通に越冬するようになった。伊良湖岬の渡りでは、6、7年前から増え、今年も、4ケタになっている。

各地の知人に聞いてみたところ、以下の答であった。

奄美大島 「ノスリですか？ 珍鳥ですね。」

沖 縄 「見たいです。」

九 州 「ノスリは越冬個体が、普通の見られる。調査はしていないが、ここ10年、増えも減りもしていない。安定してみることができる。」

では、伊良湖岬を通過したノスリはどこへ行っているのか、よくわかっていない。ただ、ここ鳴門ではたくさん渡っているが、伊良湖岬とのつながりは考えられないので、四国には沢山渡っていることがわかる。このあと九州へも渡っていると思われるが、その先のルートが分かっていない。

ノスリの渡りはハチクマやサシバが渡り終わってから主に見られるため、調査されていない所が多い。鳴門では3年。10年以上の調査があるのは、白樺峠と伊良湖岬。伊良湖岬は30年なので、全国の渡りの状況は全くわかっていない。

九州佐多岬では、若干のノスリが南へ出て行くという話は聞く。鹿児島金御岳、サシバの調査地の人に聞くと、ノスリの記録はとっていない。奄美でも出ることは出ているがめったに見られない。屋久島では聞くところによると、けっこうノスリが見られるという話を聞いたことがあるが確認はとっていない。九州佐多岬を出て、そのまま消えてしま

うということはないので、屋久島まで渡るといことも考えられる。ノスリの分布から考えれば、九州の場合は朝鮮半島からけっこうはいつているのではないかと思うが、ノスリの渡る時期に多くの所で調査されていないのでまったくわからない。

今回の集会を機に、各地で秋や春、ノスリの渡り調査のきっかけになればたいへんありがたい。ノスリの渡りについては本当によくわかっていないのです。

秋の渡りの時期は、ピークは所によってずれはあるが、だいたい10月下旬が主と思っている。では、いつまで続くのかという点は、ハイタカ属と同様に季節が進むと移動するという状態が長い期間続いていると思う。たとえば、河北潟。渡りの時期やその後もにふつうにノスリがいるが、雪が積もるとノスリは少なくなる。積雪の状態、えさがとりにくくなるとだんだん移動する。渥美半島(伊良湖岬)で、2月になっても移動している。そして、2月下旬になると北上しはじめる。ツミやハイタカも同様である。サシバ、ハチクマのように「夏鳥」の渡りとは違う。

春の渡りについては伊良湖岬では組織的な調査がされていない。春の渡りについては久野氏の竜飛崎の報告を聞いていただきたい。

伊良湖岬でのノスリの渡りは一日に100羽ぐらい。ノスリは行ったり来たりしてなかなか飛び出していない。ノスリの渡りはだらしないと長い間解釈していた。伊良湖岬では対岸まで4km足らず。

ところが竜飛崎でノスリの渡りを見て驚いた。強風の中、ものともせず渡る。対岸まで20kmくらいあるが、風の中、躊躇なく渡っていく。その時、一日に180羽ぐらいを見たが圧倒された。場所によってタカの渡りは違うことを肌でふれ、伊良湖岬だけでなく全国でタカの渡りの実態に触れなくなったきっかけになった。

<ノスリは、なにを食べているのか>

ノスリは、トビについてよく見られるタカ。繁殖の多くは岐阜以北と思われる。愛知では繁殖期に見られるが繁殖記録はなし(2004年に繁殖が記録された。)。静岡では沿岸部での繁殖記録なし。ところが長野ではふつうに繁殖しているという。内陸で繁殖する傾向があるように思われる。ワシタカ図鑑では、四国、中国、近畿が繁殖地とされているが、私は確かな記録はつかんでいない。

春、竜飛崎では10000羽ものノスリが渡る。とすれば、多くは北海道で繁殖しているのだろうか。あるいは大陸まで渡っているのだろうか。これもよくわかっていない。大陸まで行くのか、行くとすればどのくらい行くのかという調査も今後の課題だろう。

さて、ノスリは、なにを食べているのか。伊良湖岬で見ていると、ノスリはホバリングし、降りてきて捕まえるのは、カマキリが多い。カマキリは線虫を持っているので、大丈夫なのかと、いらぬ心配までしてしまう。

先日、神奈川のモグラの捕食例が放映された。昆虫類、小動物を主に捕食していると思われるが、鳥類も捕食すると聞かすが、私は目撃したことはない。ノスリは電柱で辛抱よく待っている。私は辛抱しないので、捕食のシーンまで待たないので、見たことがない。伊豆沼で、猫の死骸を食べているのに会ったことがある。雪の中からはじくりだして食べていた。ネズミの捕食も何度か見たことがある。農地ではなく、山で越冬しているノスリもいる。冬の山でなにを食べているのかわからない。

- ケアシノスリ(島根県斐川町)の例。

ドバトを押さえ込んでいたケアシノスリの例がある。地上にいたのを押さえ込んだのか、空中で一撃したのか見れなかった。聞いた話ではカケスの例がある。枝に止まっていたのをたたき落とすようにして捕らえたそうである。

- オオノスリ(石川県)の例。

天気よくなかった日。ハシボソガラスを押さえ込んでいた例がある。カラスは生きていた。飛んでいたのを捕らえたのか地上で捕らえたのかは不明。オオノスリは、足の力は強そうなので、ウサギなどでも押さえ込む力がありそうに思える。地上で獲るケースが多いのではなからうか。こういったことも是非調べて欲しい。

<ノスリ属三種(ノスリ、ケアシノスリ、オオノスリ)の識別>

識別点は大きさ、足の毛、尾の模様の三点。

- 大きさ オオノスリ>ケアシノスリ>ノスリ
- 一番の違いは附蹠。

ノスリには毛がない。

ケアシノスリには毛がある。

オオノスリは、毛があるが前面と側面にあり後にはなし。

- 尾の模様

ケアシノスリは尾の先に太いバンド。

ノスリ、オオノスリでは細いバンド。バンドの出方はノスリとオオノスリで異なるので注意を要する。

<ノスリの成鳥と幼鳥の識別>

識別点はいくつかある。

- 虹彩の色

成鳥は暗色

幼鳥は黄色か灰色がかかった黄色

虹彩の色は年齢が進むにつれて順次変わっていく。たぶん、翌年2月から3月ぐらいから褐色を帯びてくるように思える。

ケアシノスリ、オオノスリも同じと思われるが確証はない。

- ろう膜

幼鳥 グレー

成鳥 黄色

ノスリのろう膜は小さいのでよく見えない。どういう段階を経ていくかは不明。

- 下面の模様

褐色の斑があるがさまざま。

一般的に、縦斑は幼鳥

メスでは、ベタツとした傾向だが、決め手にはならない。

オスでは、腹の模様が横斑が多い。脛の模様も横斑が多い。

以上の点は絶対ではないが目安にはなる。

- 風切の後縁

秋の渡りの頃はきれいにそろっているものには幼鳥が多い。

デコボコのものは幼鳥には少ない。ただし、事故等でボロボロのものがあるので注意をされたい。

換羽は左右対称である。その年生まれの幼鳥が秋の渡り時点で換羽中であることは考えにくい。

- 翼後縁の暗色・尾の先の暗色

多くは成鳥と思えるが、成鳥・幼鳥どちらか迷うことも多い。

- からだの大きさ

とまっているときに、決め手にはならないが目安になる。

メスは大きく、オスは小さい。

比率として、メスは頭が小さく、オスは頭でっかちに見える。

オオノスリ、ケアシノスリにも共通して言える。

<ケアシノスリの成鳥と幼鳥の識別>

- 虹彩の色
ノスリと同様、幼鳥は黄色く、年齢が進むにつれ褐色を帯び、成鳥になると暗色になる。
- 尾のバンド
成鳥では上面、下面とも黒。
幼鳥では上面のみ黒く、飛んでいるとこの黒が透けて、下面は淡褐色に見える。
ワシタカ図鑑におけるケアシノスリ成鳥はすべて幼鳥の間違いである。
なお、ケアシノスリとカムチャツカケアシノスリの識別はできない。
- 上面
淡褐色 幼鳥
黒褐色 成鳥
- オス・メスの識別
オスは腹の斑は横斑状。
尾のバンド オス 黒いバンドが2本以上、途切れ途切れに3～4本。
メス 2本。2本めは細いか途切れ途切れ。
オスは小さく、メスは大きい。

<オオノスリの幼鳥と成鳥の識別>

- 日本での記録が少ない
- 虹彩の色
ノスリやケアシノスリ同様、成長するに従って黄色から順次褐色→暗色になると思われる。
 - 体色
淡っぽい 幼鳥
黒っぽい たぶん成鳥
その中間のものもかなり多い。
 - からだのバランス
ノスリ属に共通する。
以下、スライドを使つての説明が行なわれた。

5. 報告 竜飛崎の春のノスリの渡り 信州ワシタカ類渡り調査研究グループ 久野公啓

<竜飛崎の位置>

青森県の北に突き出した半島のうち西側に突き出した半島の先端部。対岸の北海道白神岬まで19kmぐらい。地形は、春は北に向かう進行方向に三角形に突き出している。竜飛崎、高野崎、大間崎、尻屋崎の4か所があり、高野崎除く3地点でタカの渡りの調査を実施したことがある。大間崎、尻屋崎でも多く渡っていると思われる。大間崎、尻屋崎にはカウント調査を行なう適地がないため、竜飛崎で実施している。

竜飛崎は先端に灯台がある。海上自衛隊のレーダーサイトがあるが、調査には邪魔である。風力発電のプロペラが11～12基ある。風が強すぎて機能していないという話も聞く。

ノスリは背後の山から来る。山で上がっても必ず来るわけではなく、頭上まで来たもののみをカウントしている。西よりの風が強い所である。期間は3月から5月半ばまでである。周りにちょっとした林もあり、渡りの小鳥も見ることができる。

<久野氏マーキングのノスリ>

(写真について)右の翼にくびれが見えるが、これはビニールのヒモでくくったもの。竜飛崎で2000年5月9日に撮影したもの。この個体はその年1月5日に久野氏自身が長野県安曇野で捕獲したもので、その同じ個体を竜飛崎の渡りで確認できた。

<渡りの期間>

3月10日頃から5月半ばまで。全期間の調査は無理なので、毎年2、3週間調査し、数年分を合成し、分析している。3月下旬から4月半ばが多い。4月5日から10日にへこみが見られ、この点については調査が必要と考えている。渡りは3月10以前から始まっていると思われる。4月1日に4300羽という記録がある。4月20日を過ぎると、渡る数はどんどん減っていく。

<成鳥と幼鳥の構成比>

3月20日以前は、幼鳥は皆無であり、成鳥のみ。4月20日頃から幼鳥が現われる。5月には幼鳥(前年生まれ)の比率が高くなる。ただし、数自体は減る。

春の渡りでは、成鳥、幼鳥の移り変わりが見られ、サシバでも見られる。やってみるとおもしろい。

<渡る時間帯>

戻るものもいる。ある日は、午前9時～昼頃が多い。ある日は、午前8時～9時、10時、11時と多い。また、ある日は、一日中、長く渡る。

おおむね、8時から9時がピークであり、午前中のゆっくりめが多い渡りと言える。

<ノスリのハンギングについて>

まず、鳥がなぜ飛べるのかということが、理解できているでしょうか。揚力だけでは飛べず、はばたきによって前進する。ではノスリはなぜはばたかずに飛べるのか。航空力学を勉強したけれどよくわからない。

水流の中の魚はどうなのでしょう。仮に、風速(時速)40kmの中でノスリが制止しているとき、逆に無風であれば、ノスリは時速40kmで飛ぶのでしょうか。竜飛崎では風速18m前後の風が普通で、立っているのも辛く、三脚が転倒することもある。この風の中をノスリははばたかずに前進していく。上昇気流ではなく、風をうまく使っているように思える。飛翔力を過小評価していないだろうか。教えをいただきたい。

<白樺峠 秋のノスリの渡り>

1991年から調査しているが、94年からのデータをグラフ化したもの。

伊良湖岬と同様に、総数がやや上昇傾向かと見える。

鳴門や他の地点も調査を継続すると、ノスリに限らず、タカの増減を見る材料を得るうえで有効である。

白樺峠では、10月20日頃すぎに多く渡る。

2003年は9月下旬から11月半ばまで似たような小山がいくつか出ている。10月10日過ぎと10月27日に大きな山がある。

20分ごとのグラフ

夕方にピークがあるケース。

- 午前中に多く、夕方までパラパラというケース。
- 夕方のケース。

- やはり夕方のケース。

夕方に数十羽の群が出たりして、比較的、動きが捉えにくいタカという印象である。

<白樺峠における年齢構成比>

7割が成鳥である。ノスリがだいたい2羽の子を育てることから考えると成鳥が多い気がする。

Q: 白樺峠で、なぜ渡るタカが多いのか？

A: はっきりしたことはわからない。北アルプスがなにか影響しているのかと思うが、他の内陸のポイントと比べても数多く出ているので、なぞのひとつ。注意深く見ているが、ヒントになるような現象は得られていない。

6. 報告 鳴門山におけるノスリの渡り 日本野鳥の会 徳島県支部 臼井 恒夫

<ノスリの渡りの概要>

ノスリの渡りの調査は2000年秋から。それまでは、9月15日から10月15日までが観察月間であり、サシバ、ハチクマにまざってノスリも少数が渡っているという程度の認識。ただ、印象としては、ノスリは遅くまで渡るらしい、だらだらと長い期間渡るらしい、という感触があった。

2000年秋 578羽をカウント。鳴門山におけるノスリの渡りの多さに気がついた年と言える。

2001年秋 1216羽をカウント。

2002年春 春の連続調査を開始。1319羽をカウントし、前年秋より若干だが多い。

2002年秋 1321羽。

2003年春 1512羽。

2003年秋 1028羽(11月7日まで)。例年より少なめの印象。

春の渡りが前年秋よりも若干ではあるがいつも多く、原因は不明。調査の精度によるものなのか、ノスリが春と秋では別のルートを通っているのか。



<秋の渡り>

2000年 一日最多でも100羽を越えない。後年のデータと比べると総数も少ない。欠測日にピークがあったのかもしれない。また、年々増加しているという話があったが、それからすると少なめの年だったのかもしれない。

2001年 10月20日から10月末にかけてピーク。

2002年 10月12日から14日に連続で3ヶタをカウントし、この年のピーク。例年よりピークが早い。

11月20日頃にもう一山ある。気温の違いなのか、出所の違いなのか。

2003年 見ていての印象としてややさびしい。100羽を越えた日が一日だけ。総数もやや少なめ。

秋には1000羽から1300羽が渡る。

<春の渡り>

2002年 ピークとは別に4月20日に山がある。なぜなのか？鳴門山を渡ったものは竜飛までいくのだろうか。

2003年 総数が多く1512羽。調査を早めの2月25日に開始している。ピークは前年よりやや遅かった。

鳴門山での調査は、伊良湖岬、白樺峠に比べればノスリの調査の蓄積は浅いが、ノスリが渡る地点がわかった、ということにとらえていただきたい。ノスリの渡りは、ポツリポツリとくるのでゆっくり見ることができ見応えがある。また、地形のせいなのか、低く近いことが多い。成鳥・幼鳥の調査については今後の課題である。

<いわゆる逆行ハイタカについて>

ノスリの渡りとともに同じ時期に逆行のハイタカを見ることができる。年により変動があるが、シーズンで250～300羽程度。朝鮮半島―九州―愛媛県佐田岬と渡って来るハイタカ属のつながりと思われる。今回の発表をきっかけとして各地で見えていただけたら、と思う。

ノスリ全般について質疑応答

Q:ノスリはなぜ増えてきているのだろうか。

繁殖状況はどうであろうか？近畿以北、中部地方、日本海側では？

A:(山形氏)おそらく、より北(サハリン?)のものが北海道にはいつてくるのであろう。朝鮮半島からはいつてくるものはどうであろうか。ノスリは渡りのシーズンが長いが見ているケースはあるだろうか。

(井上勝美氏の対馬における観察)ハイタカ調査のときに見たノスリは4羽。朝鮮半島からはいるノスリはきわめて少ない。

Q:繁殖状況は、

A:高知県 記録なし

愛媛県 記録なし。越夏記録もないと思う。

香川県 記録なし。

Q:南はどこまで行くか？

A:(新谷氏から屋久島での状況)10数年前、12月末、ノスリが多く越冬しているのを観察した。樹冠の上を飛び、ハンティングしている様子であった。ノスリは高緯度分布の鳥であることから、中国の南部から平原地帯が越冬地として想定される。マレーシアで、少数ながら越冬する。

テーマ2 各地のタカの渡り

7. 大阪府箕面におけるタカの渡り 日本野鳥の会 大阪支部 久下 直哉

大阪府箕面公園内で調査を行なっている。88年から実施されており、久下氏の参加は91年から。数はいままで公開しておらず、今回が初。

91年以降サシバは漸減傾向である。

ルートとしては、白樺峠―岩間山―箕面―甲山―六甲山―明石海峡―鳴門と推定している。

9月第四週がピーク(年により第三週)。

近年、市街地上空を飛んで、西へ行くものが多く見られる。箕面が少なく甲山が多いのは南側(市街地)を飛んでいるものが多いことによる。

ノスリについては、2002年10月12日に23羽、同年10月14日に70羽をカウントした。10月下旬に出ることがわかった。2003年は、10月19日62羽、10月26日11羽であった。

今後ノスリの渡りも見たい。

大阪箕面でもタカの渡り調査を行なっていると言うことを知っていただければ、ということで今回発表した。

8. 日ノ岬におけるタカの渡り 日本野鳥の会 和歌山県支部 沼野 正博

<日ノ岬の場所>

紀伊半島では一番西に突き出た半島である。地元のヒダカ高校の生徒が見たのが初めて、20年以上前のこと。10年ほど前から継続調査を行なっている。沼野、森本の両氏が中心。

岬に突き出た小さな山、日ノ山(標高201メートル)の頂上広場が調査地点。いまは樹が大きくなり目線より下は視界が遮られる。

真西よりやや南寄りに見える徳島県の伊島を目指してタカは飛んでいく。北側は細かい岬が多数あり、飛び出し口になっていると思われる。かなり上空を飛ばし、北側高く通過するものも多い。

<調査は土日中心>

94年10月8日613羽、9日1104羽。10月10日前後がピークで伊良湖岬からのものと思われる。

95年は、9月が天候不順で調査開始が10月10日。平日に多く飛んだものと想定される。

96年は少ない。

97年はピークに当たらなかった。

98年は10月10日654羽。

10月初めから10日の間に多い。

数はサシバが一番多く、次にハチクマが多い。ハチクマのピークはサシバより若干早く9月下旬から10月はじめまでの間である。伊良湖岬の傾向に似ている。10月下旬から11月初めはツミ、ハイタカが見られ、少ないがノスリも飛ぶ。ノスリは戻るものがあって、渡っているのかわかりにくい。県内の北では渡っている。

<タカの出方は2パターンである。>

午前早い時間に多く、あとはポツポツとなるパターン。これは、前日、近くにねぐらを取ったもの。

午後に大きなピークがあるパターン。午後2時から4時に突然多くなる。遠方のものが当日に着くケースである。伊良湖岬から日ノ岬までは200kmほど。時速30kmで飛ばせば7時間ほどである。あくまでも感じなのだが、午後多く出るときは北西風が強いときである。

<他地点の調査>

県内の他の地点についての調査を10月第一週に3年ほどおこなった。

紀ノ川沿いにある橋本市で380羽。同日、他の調査地点では出ていない。伊良湖岬では数千、奈良高見山も多く、鳴門で数百が出ている。海岸地域では群が捉えられない。岬という地形にかかわらずに飛び出しているものと思われる。今後、内陸も見たい。

<徳島との合同調査>

2002年のこと。

日ノ岬10月14日13時02分、サシバで次列風切がごっそりない個体が出現。同日14時23分徳島伊座利岬でこの個体を確認。2地点間の距離は約40km。

<ハイタカの東行きについて>

徳島県蒲生田岬の結果を見て、関心を寄せている。渡らず戻るように見えるが、渡ってきたものなのかもしれない、と思われる。

<願望・課題>

平日に調査ができればというのが願望である。

伊良湖岬からどういうルートで来るのか。岬だけでなく平地でも飛び出しているということを来年以降見たい。

徳島や奈良との連携も課題。伊良湖岬のリアルタイムの状況がわかるととてもいい。

春はあまり見ていないので、見てみたい。

タカ見の人が増えてきているので、今後も続けていきたい。

質疑応答

Q: 日ノ岬では、アカハラダカを観察例があるが、どこからのものであろうか？国内繁殖の可能性はないだろうか。

A: 表日本で見られるものがあるが、(本来ルートからの)迂回であろう。基本的には、朝鮮半島－対馬－佐世保のルート。

9. 徳島のタカの渡り調査 日本野鳥の会 徳島県支部 東條秀徳

徳島県内の過去の調査から100羽以上がカウントされた地点を、表とスライドを使って案内。

<徳島県の地勢と概要>

北から、阿讃山地(讃岐山脈)、吉野川水系、剣山系(四国山地)、那賀川水系、海部山地という高低の繰り返しと低いところでは東西の川の流れ。

鳴門、剣山、蒲生田岬と伊島などの場所を説明。

蒲生田以南の海岸線では、ときにより、数十羽の群が出現する。どこから来るか。日ノ岬と結ぶラインより、もっと南を飛んでいるのかもしれない。

<定点の問題点>

鳴門山付近の2ヶ所、四方見で300羽、ぼら山で600羽がカウントされたときに鳴門山500羽というケースがある。定点の難しさの例である。倍以上違うこともあり、ひどいときには十倍飛ぶこともある。各地とも同様の悩みがあろう。

<過去十年の趨勢>

93年は少ない。伊良湖岬では少ないことはなく定点の問題であろうか。

趨勢としてはタカの数には減っているのであろう。

鳴門山でのピークは、以前は10月初旬であったが、近年は9月中旬から下旬である。

蒲生田岬－明神山－伊座利峠では10月上旬がピークである。

<春の渡り>

鳴門山で高知ほどの数が拾えないのはなぜかという観点でここ2年ほど調査を行なった。その結果、県中央付近で飛んでいることがわかった。調査した2年は、ほぼ同じパターンで出現し、2000羽近く見ることができた。いずれも早朝に集中している。

<東行きハイタカ属>

2003年秋、蒲生田岬でノスリの時期に調査を行なったが、ノスリは少なく、ハイタカ属の東行きが多数出ることがわかった。東行きハイタカ属は鳴門でも出るが鳴門よりも多い。写真判定をおこなってもハイタカが多い。

反対向きハイタカ属について

井上勝美氏

- ・朝鮮半島から対馬へ飛来することを確認した。
- ・対馬から九州へ飛来することも確認した。
- ・愛媛県佐田岬で西からはいつてくることを確認した。
- ・佐田岬で見ていると西へ行くのはツミであり、徳島での東行きはハイタカ、西行きはツミではないかと思われる。識別をしっかりとする必要があり課題として欲しい。

沼野正博氏

- ・日の岬でも四国に向かうのはツミが多い。
- ・ハイタカはよくわからない。渡らずに戻った、と思っているものが、四国からのものかもしれない。

10. 香川県のタカの渡り 日本野鳥の会 香川県支部 矢本 賢

香川県では継続調査は行なわれておらず、データも少ないのであるが、今回、四国四県でということで発表させていただく。香川県は小さな県であり、南に讃岐山地があり、高いところで標高1000mほど。標高1043mの大川山で、10数年前から観察会を年一回行なっている。観察できるタカは100羽程度である。

以前、雲辺寺山(香川と徳島の県境に位置する。)からの観察で、1000羽ぐらい飛んだことがあると先輩から聞いている。このときは阿讃山地沿いではなく瀬戸内海方向からスライドして斜め方向に飛んだという。瀬戸内海沿いに適当な観察ポイントがどこかないか、ということで荘内半島で調査をおこなった。半島に紫雲出山(標高250mほど)がありそこで数年前から調査している。その結果、瀬戸内海沿いに飛んでいくものが少なからずあることがわかった。

2001年からの3年間で、タカ総数330羽。サシバ60%、ハチクマ35%、ノスリ5%という構成比。

今後、瀬戸内海を飛ぶものをもう少し調査したい。また、讃岐山地沿いことぶものがあり、これについても調査したい。

11. 高知県のタカの渡り 鷹見の老翁のこぼれ話 日本野鳥の会 高知支部 西村俊彦 <高知の観察地の概要>

高知は南北15kmあり、その全域でタカが渡る。南に標高200mほどの山が連なり、潮見台、五台山、春野運動公園というコース、北は標高3~400mの山が連なり、観月坂、城が森というコース、が渡りの多いコースである。海岸線と平行に飛ぶ。

<96年の調査から~南海上を渡るサシバ>

この年はどこが多く飛ぶのか、南北に4地点を設定した。

10月13日、春野運動公園で観察した。南が開けている観察地点で、南に遠いものが観察された。翌日も海上と思われるところを飛んでいることがわかった。20倍双眼鏡でやっと確認できる程度。

10月15日、海沿いの竜馬記念館に場所を移し調査した。サシバは海の上を渡らない、という考え方は訂正する必要があると感じた。風向きも、北の風に流されたわけではなく、南からの微風であった。海上を渡るサシバが確認された。その後、この種の調査はなされていない。とともに、さらに南がどうかという疑問もあるが、わからない。弓なりになった高知県の海岸線の、どこから出て、どこへはいるのだろうか。もう一度見られたのが、97年10月6日で、約750羽。この日の動きは、南→頭上→北→頭上であった。

<時間によるコースの変化>

(資料 表4「汐見台(南)と城が森(北)とのサシバの比較」)

南→北→南、と時間帯によって渡るコースが変わることがわかる。このことが定点を設定しにくい理由のひとつである。

<春の渡り(資料 表6について)>

春の渡りも高知では多数見られる。96年3月31日、4月1日はとくにきわだった渡りであった。(このとき撮影されたビデオが会場で放映された。)

12. 愛媛県高茂岬と由良半島の渡り 日本野鳥の会 愛媛県支部 楠木 憲一

サシバの渡りについて過去12年間、毎年10月下旬までのデータを元に発表。

足摺岬を除き、四国全体からサシバは九州へ渡る。北から順に、佐田岬、明浜、由良半島、柏島の各ポイントから出る。四万十川とその支流中筋川にはさまれた三角地帯にはいり、頂点にあたる高茂岬、由良半島に集る。

高茂岬の定点は標高140m。由良半島の定点は、船越運河の手前標高110mの地点。二つの定点間の距離は16kmあり、見える範囲が3km、とすると、二点間が10kmあり、この間を多く飛んでいる。定点からは半分ぐらいが見えていると想定している。9月は由良半島中心、10月は高茂岬中心に調査を行なっている。早朝6時から7時までは、連続で毎日調査する。

高茂岬の90年からのデータを見ると、多いときは15000羽ぐらいであり、年によりでこぼこがある。今年(2003年)は少なく4000羽ぐらいである。

由良半島での渡りは、95年に発見し、その後、順調に減っている。今年(2003年)は6000羽ちょっと。19000羽がピークで、12000羽程度が普通、今年10000羽。由良半島のほうが毎年多い。

高茂岬でのハチクマは西北西か北西に向かい、サシバは西寄りの方に向かう。明らかに向かう方向が異なる。由良半島では、ハチクマ、サシバとも同じである。

渡りはいずれの地点とも早朝が多い。由良半島は、白樺岬からのもので、9月20日から10月4日頃まで。二つの山があるが、山の一つは白樺岬から由良までの間での繁殖分プラス伊良湖岬からの一部と思われる。高茂岬は、伊良湖岬からのもので、10月20日頃まで。

いわゆる三寒四温、気温が大きく関係しており、気温が大きく下がると、ドッと飛ぶ。白樺岬から由良半島までは三週間ほどかかり、長い。休みながら来ると思える。伊良湖岬から高茂岬までは短く、急いで飛んでくるといえる。由良・高茂では2コースのタイミングは、ずれているが、鹿児島県高山町では一群となる。

<気温と渡りの関係の考察>

気温と渡りの関係を、白樺岬のデータとそこから200km離れた新津市の気温からの考察が発表された。気温に反応しながら飛んでいると言える。同じ気温になる日のズレが白樺岬と伊良湖岬の渡りの時期のズレとなる、と考えられる。

<サシバの渡りと風向との関係の考察>

九州以南について、サシバの渡りと風向との関係の考察が発表された。

13. 大分県でのタカの渡り 渡会 満寿男

愛媛県佐田岬の対岸にあたる佐賀関町の関崎での調査を発表。

関崎はハチクマがメイン。2003年9月26日ハチクマ160羽。かなり広範囲にはいってくる。広範囲にはいって

る総数のカウントは不可能。

9月27日内陸部での調査。関崎の50km後方にあたる標高700mの障子岳。ここで、飛んできたハチクマは方向を真西へ変える。サシバは、南西へ向かう。

サシバは海上を渡るものがかかなりある。鏡山(標高645m)で調査した。

ツミも少数ながら確実に渡っている。

ハチクマは10月なのであまり出ていない。

14. 愛媛県佐田岬の渡り 日本野鳥の会 愛媛県支部 楠木憲二氏

調査データがあまりない。

定点は長い半島の狭くなっているところにあたる。

ハチクマで最大180羽、サシバの最大が200羽、ノスリが最大40羽。シーズン中、きちんと見れば、サシバは2～3000羽ぐらいだろうか。なおノスリは高茂岬では飛ばない。

データが少ないが、春のノスリは最大80羽だが、もう少し出ているかもしれない。春のハチクマが最大170羽。



15. テレメトリー調査実習

久野氏により、実際の送信機を使って、テレメトリー調査の実習が行なわれた。

16. ARR CNの活動と最近の成果

ARR CNタカ渡り共同調査事務局 新谷 保徳

<ARR CNの概要>

1999年に設立させたNGOで、現在の参加者は25カ国、134名。アジア中心であるが、欧米からの参加者も若干名ある。

目的は、アジアにおける猛禽類の情報交換、猛禽類の渡りの共同調査、アジア固有の猛禽類の共同調査の3点である。

<渡り共同調査>

99年マレーシアの会員の呼びかけにより、「煙害影響調査」が行なわれた。これを契機に毎年共同調査が実施されている。

<アジアで見たハチクマ>

アジアにおけるハチクマの繁殖地、越冬地、想定される渡りのルートと観察されている渡りのハチクマについて紹介された。